

NPO 純正律音楽研究会会報 ～2013年8月発行～

ひびきジャーナル

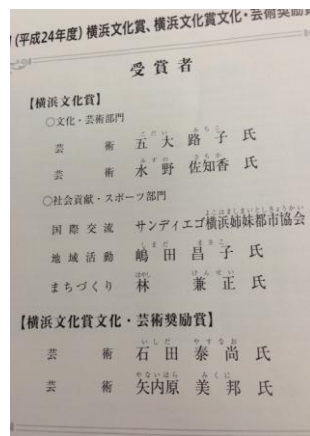


〒168-0072 東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 Tel:03-5317-0291

Fax:03-5317-0289 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

No.37

発行日 平成 25 年 8 月 31 日
発行責任者 NPO 法人 純正律音楽研究会
編集 相坂政夫



平成 24 年 11 月 21 日横浜文化賞・贈呈式後のレセプション

夜風は秋を感じさせる今日このごろ、会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。昨年 11 月 21 日第 61 回(平成 24 年度)【横浜文化賞】、【横浜文化賞文化・芸術奨励賞】贈呈式・記念コンサートが、横浜みなとみらいホール 小ホールで開催されました。当代表水野佐知香と五大路子さんが【横浜文化賞】を受賞いたしました。さて、いよいよコンサートの季節です。9 月 21 日土曜日、午後 2 時から新宿文化センター 小ホールにて純正律音楽コンサートを開催いたします。出演はハーブの三宅美子さん、箏 吉原佐知子さん、ヴァイオリン 水野佐知香、他。濁りのない美しいハーモニーをご堪能下さい。年末のコンサートは 12 月 14 日土曜日の予定です。多くの方々のご来場をお待ち申し上げます。

音楽祭とロサンゼルス

洗足音楽大学教授・ヴァイオリニスト

NPO 法人 純正律音楽研究会 代表

水野佐知香

今年は、梅雨があつという間に過ぎ、突然夏がきてしまった感じがいたします。暑〜いと思ったらゲリラ豪雨！本当に大変な世の中！！

きっと、玉木さんが「皆、いろいろ抱えて生きてるね！こんな時こそ純正律音楽で世界を救うのよ！」と、天国から叫んでいるように思います。

会員の皆様、いかがお過ごしでいらっしゃいますか？

私は、今、ビバリーヒルズ音楽祭でコンサート、マスタークラスのレッスンを行うためにヴィオラの大野かおる氏と共に生徒さん、そしてご父兄、総勢37名で東京からロサンゼルスに向かう機上にいます。

今年度は7月29日まで授業があり、昨日7月31日も指揮者の秋山和慶先生と、「おひさま」、ドラマ10「第二楽章」などの音楽を手がけていらっしゃる渡辺俊幸先生とともに、フェスタサマーミューザコンサートで、渡辺先生がシナリー(株)のために作曲された「愛・希望」を洗足学園音楽大学管弦楽団と共演しました。素敵なメロディーとオーケストラの雄大なハーモニーで、地球にとっても大切な「海」の成り立ちを表現した曲、お客様でいらした〈シナリー〉の方々にもとても喜んでいただいたようです。

そうそう、余計なことですが、先日放映されていたドラマ10「第二楽章」のヴァイオリン指導に娘の「荒井章乃」携わり、エンディングのバックに彼女の小さい頃の写真が載り、ちょっと私の周りでは話題になっていました。

私はといえば、6月の雨の日、都内で仕事を終え首都高速を渋滞気味のところを運転中、羽田トンネルに差し掛かる所で追突され、大した事故ではありませんでしたが、やはり1週間後位から腰、背中にいやーな鈍痛があり、身体のバランスが崩れ、まっすぐ立って素敵に歩けなくなるハプニングがありました。普段何も考えずに真っ直ぐ立ち歩いていますが、脊椎、頸椎を支えている筋肉にも意識を持ち、普段の普通の自分に感謝をしなければと思う瞬間でした。

おかげさまで、指圧と気功の先生の集中的な治療を受け元気になりましたので、ご安心くださいませ！

というわけで、急遽、この飛行機に乗るのに腰の負担を考え、ビジネスクラスにランクアップ！！快適な旅をしています。このシート、「横になって寝られて、寝がえりもうてるわよ」と話には聞いていましたが、昔の寝台列車のよう！乗務員の方がいらして、「ちょっと立って」と言われシートを伸ばしてベットの出来上がり！すでにシートも敷いてあり寝るだけ！！本当に足を伸ばし毛布を掛けグッスリ。「朝ごはん」と起こされるまで熟睡。いくらでも寝たいのに…！まさに、折りたたみベッド。あつと言う間のフライトでした。どこの会社？とお聞きになりたい方！「シンガポール航空」でした。

さて、この旅行に出る3日前、今回ビバリーヒルズ音楽祭で一緒にオイストラフの一番弟子のオレグ・クリサ先生から夜中にメールがはりました。

「今、フィリピンにいるけど、お散歩をしてお財布をホテルの部屋に忘れて、取りに帰ったらお財布を盗まれてしまった。この中にはパスポート等大切なものが入っていて大変困っている！私に\$2800すぐに送金してほしい！」と。このメールは、先生と一度やり取りをしたマネージャーにもきていて、詳しい方にお聞きいたしましたら「なりすましメール」とか！送られて来た私の友人は、「送ろうとおもうのだけど？」と電話がありました。日本でも、[おれおれ詐欺]が大流行り！銀行で急いで振り込みたい時も大変！横行している地域では、いちいち色々聞かれとても混み、時間がよめないようです。

さて、10日間の素晴らしいフェスティバルを終え帰国の途についています。今回は会場がユダヤ教のテンプルということもあり、宗教についても考えさせられ、またソロのレッスン、室内楽、オーケストラと参加した学生達は、外国の同世代の友人もでき国際交流もし、広大なアメリカを肌で感じる事ができてすばらしい体験をしました。最後は感動の中フェスティバルを終えることができ、主催者のグレゴリーさんのご自宅でのパーティーに！20時からの本番終了後だったので、23時過ぎてのおうかがいでしたが。大盛り上がり！奥様の手料理を夜中に堪能！「来年もぜひ！！」。と言われ、(毎年は生徒さんの負担も大きいし、日本に残っている生徒さんもあるし、やっぱり日本がいいし、なんて思いながら)ドギマギ！また、電車、タクシー、コンビニなど、何でもすぐ手にはいる、今の日本の安心できる生活に感謝しながら、帰国の途につきました。

さあ、またこのあとは19日から6日間「セミナーinトナム」です。これまた大変！！34人の受講生が4回ずつレッスン、今度は私が呼びしたオレグ・クリサ先生とジェラルド・プーレ先生の3人でスケジュールを組みますが、寝る暇ある？！？と、自問自答！！でも新しい出会いと生徒さん達の成長にワクワクしています。

9月・10月はコンサートが目白押しです。

☆9月8日みなとみらいホール2時からヴィルトゥオーゾ横浜のコンサート
今年ブラームスの六重奏がメインです。

☆9月21日新宿文化センターで純正律のコンサート

洗足学園に新しいリハーサル室「シルバーマウンテン」が完成！

お披露目コンサートでの公演スケジュール

わたしが出演するコンサートです。

☆10月1日「渡辺俊幸の世界」

☆10月2日「水野佐知香リサイタル」

☆10月16日「ピアノ五重奏の夕」

☆11月19日「水野佐知香のヴァイオリンと武田忠善のクラリネットの夕」

☆11月30日「師弟共演、毛利文香、山根一仁、水野佐知香」

☆12月9日「ヴァイオリンと電子オルガンとの世界」

☆12月14日「玉木宏樹の世界、弦楽四重奏とサクソ四重奏のコラボレーション」

☆12月24日「ベートーヴェン七重奏曲を中心に」

そしてみなとみらいホールの「ジルヴェスターコンサートで2013年終了！」

お気に召すプログラムがあってもなくても、皆様ぜひお足をお運びください。

音楽で感動をご一緒に！

純正律音楽研究会事務局の相坂さんまでお申し込みください！！

では、コンサートでお逢い出来ることを楽しみに！！

ムッシュ黒木の純正律講座 第 36 時限目

平均律普及の思想的背景について(25)

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

前回は、日本社会がリスク管理が苦手なこと、そしてそのリスクの語源にアラビア語があることを述べた。今回は、リスク管理を行なう際に用いる数値データの扱い方について説明したいと思う。

社会に関する調査を行い様々なデータを集計し、解釈する学問に統計学がある。日本においてリスク管理が上手く機能しないのは、何より、このような統計学の数値の扱い方と自然科学における数値の扱い方の違いを理解していないことに起因しているといっても過言ではないだろう。ここで自然科学的な発想と、統計学に見られる人文・社会科学的な発想の違いを理解するために、昨年亡くなったアラン・デロジエールの論考を参照してみたい (Alain Desrosières, 《Comparer l'incomparable. Essai sur les usages sociaux des probabilités et des statistiques 》, in Touffut J.P. (éd), La société du probable. Les mathématiques sociales après Augustin Cournot, Albin Michel, Paris, 2007.)。デロジエールは「リスクの制御、マクロ経済の分析、公共マネジメントの指標」などに対処するためには「混同されることが極めて多い二つの思想を分けて考えることが必要不可欠である。その二つとは数量化の思想と測定思想である。数量化する、という動詞はここでは広い意味で使われる。すなわち、かつては数字ではなく言葉で表現されていたことを数字という形で表現し、存在させるという思想である。対して、自然科学の着想から生じる測定思想とは、何か既に現実的な測定法を用いて測定出来る形で存在することを前提にする。例えば、モンブランの標高が挙げられよう」と言う。例えば、自然科学の数値とは、モンブランの標高である 4810.9m のように万人にとって常に同じ値のものであり、立場や解釈によって数字が異なることはあり得ない。また、一気圧以下の地点における沸騰水の温度が 99.974 度というのも、たとえ測定条件によって多少の誤差はあるものの、常に同じ意味しか持たない。自然科学はこのような比べることができる数値を比べることによって分析を行い、何かしらの解答を求めてきた。その成果は明らかだろう。それに対して、人文・社会科学の強みは「比べることのできないものを比べる」ことができる点にあると言える。デロジエールが統計学における数値を使った分析の標語として掲げたこの文言の意味を理解す

るために、ここではフランスの国家警察と憲兵隊の例を取り上げて見てみたい。この二つの警察組織は飲酒運転の検挙率に関して正反対の態度をとる。国家警察は検挙率が上がるほど取締りの成果として予算増額を主張するのに対し、憲兵隊は下がるほど啓蒙活動の成果として予算増額を主張するのだ。すなわち、統計学の数値とは、それを扱う人間や団体の活動方針や思想によって解釈が異なるものということになる。だから「比べることのできないものを比べる」とは、自分たちの立場や目的の中でいろいろな数値を参考にしながら取るべき針路を決めていく、という姿勢を象徴しているものだと言える。自然科学は確かに自然の事物に関して実り豊かな知見を提供してくれる。しかしそこで得られた数値は所詮比べることのできる数値にしか過ぎない。

結局、日本の現在の科学の行き詰まりは、この自然科学的な数値と文・社会科学的な数値の扱い方を混同しているところに起因しているのは明らかだろう。

純正律の歴史と 19 世紀の調律

玉木宏樹遺作

1. ピタゴラス音律と純正律

オクターヴを単純に 12 等分し、響きを犠牲にして調律と演奏をたやすくしたのが平均律だが、この平均律の濁った「ドミソ」はなかなか浸透せず、やっとプロにまで認知されたのが 100 年くらい前のこと。

だからそれ以前の音階の調律が平均律であったはずがない。ミーントーン(中全音律)、ヴェルクマイスター、キルンベルガー等、チェンバロ(ピアノの前身、ハープシコード、クラヴィアともいう)用にも種々の調律があったが、その基礎になっているのがピタゴラス音律と純正律である。

ピタゴラスとはもちろん、幾何学では先刻ご承知のピタゴラス定理の発見者として有名だが、彼は数学者というよりは古代ギリシャの数秘学による秘密結社の親分だったらしい。

そのピタゴラスが、一本の弦(仮に「ド」としておこう)を張った一弦琴

の響きを分析したところ、その長さの二分の一がオクターヴ上、三分の二が完全5度上の「ソ」であることを確認した。

そこで、正確な音階のための測定として、完全5度上の一弦琴を用意し、またその弦の完全5度をとる。すると「ドソレ」という三つの完全5度の積み重ねができる。

次は「レ」から5度上の「ラ」という風に音をとっていくのが基本だけど、この順でいくと、すごい高い音程になってしまうので、「ドソ」の次の「レ」は一度オクターヴ下に下げる。この順番で音をとっていくと、13回目「シ」の#に到達する。今のピアノでは「シ」の#とオクターヴ上の「ド」は全く同じ高さになっているが、ピタゴラス音律ではこの「シ」の「#」は、オクターヴ上の「ド」より半音の100分の24高い。しかしこの近似値の高さを、オクターヴ上とみなして並べ替えたのがピタゴラス音律である。

100分の24高いオクターヴ上の「ド」を100分の24低くして純粋なオクターヴにすると、どこかにしわ寄せが行くはずだが、その100分の24を分散させないで、使わない場所の完全5度に押し込める。これがピタゴラス音律である。だから、昔から100分の24の差を平均的に完全5度に分散させる方法論を考えた人はたくさんいた。これが平均律なのである。世界で最初に平均律を考えついたのは中国人だといわれている。

このピタゴラス音律というのは、実はピタゴラスが発見したわけではなく、ごく自然に世界中に存在している。中国の三分損益とか、日本の順八逆六という調律法が実はピタゴラスなのである。

日本の順八逆六の場合「ド」と「ソ」の間は順に半音が八つ、そして逆に半音六つ下がれば「レ」になる。そこで、順八逆六というのである。

ところで、この方法で並べ替えた音階には「ファ」の高さの音がない。そこで「ド」の完全5度下から始めると、純粋な「ファ」の音ができる。実は中世のオルガンの基音は「ドレミファソ」という音階を作るために「ド」の完全5度下の「ファ」であった。ジャズの世界ではリディアンモードスケールが大流行りだが、理論の根拠は中世からあったともいえる。

さて、一弦琴で自然な音程をとる方法がもう一つある。

これはギターでもハープでも、ヴァイオリン属の楽器でもごく簡単にできる事で、それはハーモニックス（フラジオレット）を細かく分析してゆく方法。これは完全な自然倍音であり、それを並べ替えた「ドミソ」のハモリは

非常に美しい。この「ミ」の高さはピタゴラスでは絶対に現れない高さである。中国とか日本の音楽はピタゴラスなので「ドミソ」がハモるという概念は一切無い。

また一方、ピタゴラスのはじめの三つ目の音「レ」は、純正律の自然倍音には絶対に存在しない。チェロやヴィオラは下から「ドソレラ」と完全5度に調弦するが、この、下から三つ目の「レ」を「ソ」の完全5度上に調弦することによって、既に純正律的矛盾が起こる。それは、「ソ」の弦、つまり、G線で「ラ」を押さえた時に起こる。下の「ド」と長6度をキレイに完全にハモると、その「ラ」と「レ」の開放弦が絶対にハモらない。「レ」に対して「ラ」が低過ぎるのである。また「レ」に対して完全4度下にキレイに協和させると、今度は下の「ド」との間の長6度が全く合わない。

12しか鍵盤の無いピアノ類を、純正律でキレイにハモる「ドミソ」「ドファラ」「シレソ」と調律すると、「レファラ」が絶対に使えない。「レ」と「ラ」の完全5度が地獄に堕ちるほどの不協和音になる。

この「レファラ」が使えないことから、長い間「純正律は絵に描いた餅だ」と言われてきた。しかし、ヴァイオリン属の5度調弦そのものの中に、既に矛盾があるのだ。それは、純正律では使えない「レ」と「ラ」を完全5度に合わせた事で生じている。

先ほどのチェロとヴィオラの音程の矛盾も同じことである。

さて、では世の中、キレイにハモる純正律だけで音程をとれば申し分ないと言い切ることができるかといえば、そうでもない。メロディとして歌う時、純正律の「ミ」と「ラ」はいつも聴いているよりは少し低く、旋律的には低く沈み込んで浮き立たない。また、バックオケやバックコーラスの、完全に美しい純正律で和音をとっている時に、同じ音程で歌うと、バックの音と協和しすぎてメロディラインが浮いてこない。バックは純正律、メロディはピタゴラスという組みあわせがとても効果的なのである。

ところで、ピタゴラスでは「ドミソ」は汚くて使えない。しかし、完全4度の組み合わせのハーモニーは、これまた素晴らしく美しい。雅楽の笙のハモリがきれいなのはピタゴラスだからである。

ピタゴラス音律は広く世界中に存在しているが、「美しいドミソ」を基礎にした純正律は、ヨーロッパで実用化され、発展した。これが西洋音楽の和声法の基礎になっている。だから、ピタゴラス音律で調律された、中国、日

本には「ドミソ」のコンセプトは生まれなかった。

しかし、ヨーロッパでも、中世のキリスト教音楽はピタゴラスだった。天井が高く、自然のエコーが深い教会堂では自然倍音がきれいに発生する。そして、最初の多重コーラスは、オクターヴ・ユニゾン、そして平行5度の世界が生まれた。そこへ第三の音、「ミ」という純正3度がいつ一般化したかという事には、なかなか定説が無い。天井の高い余韻の中で、自然に発生したという説、これが一般によくいわれている。

アラビア音楽からの影響という説、そして最近では、純正ドミソを発見したのは、ヨーロッパの北の果て、ケルト人達だというふうにいわれだしている。だとすれば、さすがはエンヤやアディエマスを生んだ風土だといえる。

2. 19世紀の調律の謎

ピアノが発明される以前のチェンバロ（クラヴィア）やオルガンのような鍵盤楽器は、今と全く同じでオクターヴに12個しか割り当てがない。このオクターヴの間に鍵盤12という制約は、実は、ピタゴラス音律によって宿命づけられたのである。

世の中の音楽が全てピタゴラス音律を基調にしていた時は何の問題もなかったが、一度「ドミソ」の天国的な美しさにハマってしまった人達にとって、鍵盤楽器の12個という制約は大変厄介なものになってしまった。ピタゴラス音律では「ドミソ」は全くハモらないのである。

もちろん机上の空論としては、12平均律を提唱した人達（マラン・メルセンヌ、仏、1588～1648 他）もいたが、耳で判別できない調律法として、全く実用化されなかった。そんな中で、最も純正律に近い調律法として、ミーントーン（中全音律）という調律法がアーロン（ピエトロ・アーロン、伊、1490～1545）によって提唱され、瞬く間に普及していった。この調律法というのは、長3度の「ド」と「ミ」の協和の美しさを表現するための工夫である。

つまり、長3度を純正に残すため、完全5度を狭く不協和にしたのであるが、それにより、「ド」と「ミ」の協和が強調され、少し不協和な5度は我慢できる限界である。

この調律法は長い間、西洋音楽では主流となり、ヘンデルやモーツァルト

は絶対的なミーントーン主義者になった。

しかし、この調律法からは、どうしてもない制約が生じた。それはまず、長調の和音は美しいのに、短調の和音が犠牲になってしまったということである。

現在の音楽理論では、長調は完全無欠な音階だが、短調は不完全である、だから長調は一種類なのに、短調は三種類もあると教えたりするが、そうではないのだ。短調の音楽の発展を妨げたのは、ミーントーンの一種の弊害なのである。

そしてまた、ミーントーンにはもっと重大な欠陥があった。それは、ある調を基準に調律すると、シャープ系、フラット系、合わせて六つの調しか転調できないことで、これをはみ出して七つ目に転調すると、世界が崩壊したかのような不協和な世界が出現する。

音楽大学進学に欠かせない楽典の中の古典的なソナタ形式（C・P・E・バッハが考案したともいわれている）は、第一主題に対して、第二主題の調性とか、第一楽章に対して第二楽章の調性とかに、厳しい制約が課されているが、それは、この六つ以外の転調が出現しないための禁則だったはずである。

ビバルディ、ヘンデル、ハイドン、モーツァルトと続くミーントーンの世界は、完全にモノフォニーであり、縦割りの美しさを強調するため、転調を犠牲にしても「ドミソ」の美しさを強調したのである。でも、モーツァルト達のミーントーンは、実は、その前のバロック時代の荒々しいポリフォニー（多重メロディ音楽）に対するポストモダンであり、縦割りの響きを取り戻す運動だったといえる。では、ポリフォニーが中心だったバロック音楽（荒々しい、という意味もある）ではどういう調律が使われていたのだろうか。

「平均律」と誤訳された、バッハのいう、「ウェル・テンパード」とは、どういう調律だったのだろうか。これは最近の純正律復古運動の中でも大変興味深い問題で、今では、多分、ヴェルクマイスター第三であったろうといわれている。

この、ヴェルクマイスター（アンドレアス、独、1645～1706）という人の調律の工夫には、純正律とピタゴラスを共存させることで、シャープやフラットの少ない調ほど純正律に近く、シャープやフラットが増える調になるほどピタゴラス的になっていくという特徴があり、この方法論ではミーントーンにとらわれることのない調が使えるため、12の、長短合わせて24調の

演奏が可能となるのである。このヴェルクマイスター的調律を不等分平均律などというが、これを改良したのがキルンベルガー（ヨハン、フィリップ、独、1721～1783）で、彼の「作曲教程」という教科書は長い間、その頃の作曲学生の教本となっていた。

初期のベートーヴェンはモーツァルトの影響が濃かったから、ミーントーンで作曲していたが、やがて転調にはそれほどの制約のないキルンベルガー調律に移ったものと思われる。キルンベルガー調律による転調の自在さは多くの作曲家に支持されたと思われ、1900年頃、やっとドビュッシーによって平均律が認知される寸前まで、いろんな作曲家と演奏家たちは、時にはミーントーン、時にはヴェルクマイスター、時にはキルンベルガーと調律を使い分けていたはずで、そういう意味では今の演奏家達がおしなべて平均律でそういう作曲家の作品を演奏するのは、やはり一種の冒瀆とはいえるだろう。

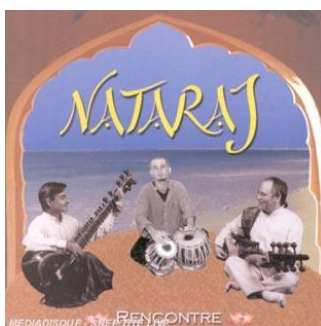
CD レビュー 純正茶寮

< Nataraj >

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

Rencontre

Nataraj



フランス人2人とアメリカ人1人の3人組のシタール、サロードとタブラによる北インドの伝統音楽の作品。

フランソワーズ・ドゥエに薦められて初めて聞いた時はてっきりインド人が演奏しているのだと思っていた。正直、私にはインド人による演奏と区別がつかない。それもそのはず、3人ともインドに留学して楽器を習得しているのだそう。

転調はなく、弦楽器による澄んだ和音の上に様々な微分音程からなるインド特有のモードによるメロディがのる。インプロビゼーションを基本とする音楽だ。

タイトルが『Rencontre=出会い』とフランス語なのだが、更に、レコーディングの場所を見るとマルセイユとある。しかも自主制作とある。道理でフランスの Amazon を検索しても出てこないはずである。購入する場合、このサイト (<http://www.rdm-video.fr/cd-musique/A000260725/rencontre-nataraj.html>) にアクセスするしか方法はないようだ。

これだけのレベルの作品が、インドの地を遠く離れて、フランス人とアメリカ人によって南仏の地で製作された、という事実には、ただただ、感心してしまう。こういう伝統音楽を演奏する際、平均律の楽器を入れてしまうと微妙な音程がすべて崩れて、あつという間にぶち壊しになってしまう。実際、このような細かい微分音程や和音を習得するには理論的な学習もさることながら、体による体得が重要となる。自国以外の文化をここまでマスターし、そしてそういった人間が活動できる場所が用意されている、ということに、文化の持つたくましさを感じてしまう。

なお、グループ名の Nataraj はシヴァ神の踊りのことを指すらしい。

【偶然のみちびき】 インターネットマガジン篇

純正律音楽研究会 正会員
翻訳家・きき酒師 川合 浩

「iNTERNET magazine」をご存知でしょうか？今では空気の様に当たり前になったインターネット。その普及を目的に 1994 年 9 月 17 日に創刊された本です。当初は隔月刊、月刊化は翌年 6 月号からだった様です。

私がインターネットを始めたのが 1995 年 9 月。それは Windows 95 が発売される 2 か月前、Windows 3.1 の頃です。当時のこの本の定価が 1,980 円。当時は高く感じられて購入には至りませんでした。インターネットの普及と歩調を合わせる様に発行部数も伸びたのでしょう 1,280 円になり、980 円だったか、この位になってからやっと毎月購入する様になりました。CD-ROM が付録につ

いていて、インターネット関連ソフトウェアやアップデートなども収録されていて、必須の感もありました。

ある時期、といっても、つい先程パソコンの中からログを発見し 2001 年 4 月のことでしたが、創刊号から揃えたいという欲が出て来て、あの有名なネットオークションを検索してみたら、なんと出品されているではありませんか。「月刊 INTERNET MAGAZINE 創刊準備号から 4 年分くらい」（ログにあった当時のタイトル）。価格は 100 円。出品者によれば、揃っている所に意味があるとして分売不可。さらに但し書きもあり、量の関係で引き取りに来る事と。場所は港区青山。当時の住まいからさほど遠くはない、タクシーでもたいしたことはないだろうと判断し、実際の運搬方法は別途考える事にしました。4 年分は当方希望としては少々多いのですが、出品者のお気持ちに配慮して、とりあえず入札。息を飲むようにしてその終了の時を待っていると、無事に落札。先方とメール連絡し、引き取り日時を電話で調整して、帰りはタクシーもやむなしと覚悟を決めて電話を切ると、なんとその時をまさに見計らった様に電話のベルが鳴り、誰だろうと電話に出れば、なんとめずらしく中学の友人。しかも彼、クラウンに乗っています。これ幸い渡りに船と、「ちょうど良かった、アッシー君やってくれないか？」と聞けば、「いいよ」と快諾してくれました。友人と段取りをして、さっそく青山の引取先へ。そこは出品者様の事務所のようで、横長の段ボールに納められたインターネットマガジンが、さすが量がありました。友人も手伝ってくれてクラウンに積み込んで、出品者様に代金 100 円を、支払という程のものではありませんが、支払い、決済を済まして、いい物を手に入れてウキウキと、しかもアッシー君付きで帰宅し、自宅の倉庫に使っている四畳半に運び込んで、一件落着。

しかし、これも長くは続きませんでした。インターネットマガジンが創刊準備号から揃ったのはいいのですが、自分で購入しはじめた頃からはタブって所有している状態になり、コクヨのスチール本棚の結構な部分を占めていました。断腸も思いもありますが、創刊準備号から 4 年分は処分しようという気に至りました。その需要の現状はどうかとくだんのネットオークションを見にいきました。すると、やや！あるではないか！「求む、創刊号から約 4 年分」。「売る」ではなく「求む」の禁断の逆オークション。こちらの売りたい範囲と、あちらの求む範囲がどんぴしゃ！これまた幸いと早速「求む」の出品者に連絡を取ろうと「有ります、創刊準備号から約 4 年分」とメッセを発信しました。打て

ば響く様な即答を期待していましたが、なかなか返信が来ない。丸一日経過してからだったか、返信がありました。心配しました。この時期は、前述のログを見ると 2002 年 11 月でした。先方とやりとりをして、受け渡しはもちろん拙宅に引き取りに来てもらう事にして、価格は当方取得価格と同じ 100 円。あとで、創刊号については入手済みと言う事でしたので、創刊号は当方の手元に残す事で合意し、創刊準備号については、4 冊もあったので 1 冊を手元に残す事にしました。それが写真の 2 冊です。今回の落札者は T 氏で、メールには「社会人大学院生です。創刊当初から現在までのインターネットマガジンからデータを読みとることで研究を進めようとしていたのですが、なかなか昔のものが入手できずに困っておりました」と(前述のログより)。更にメールのログを探してみると、「Tue, 19 Nov 2002」のメールに、以下括弧内はそのままの引用です。「実は川合さんから最初の連絡を頂いたとき、私は半信半疑でした。今年 6 月頃から躍起になってインターネットマガジンを収集していたのに、創刊当初の 4 年分はなかなか集まらなかったからです。ところが、ヤフーオークションで「求む！」と声を上げると、即座に川合さんから「4 年分あります」とメールが届いたのですから、あまりの早さにびっくり。しかも、研究資料として使うと言うことに、これだけ理解を示してくれる方に巡り会えるとは、全くもって驚くべき事です。」

T 氏には自家用車で受け取りに来てもらって無事受渡完了。創刊号は当方手元に残すと言う事で、決済は金 1 円。

その後、忘れかけた頃に論文の別刷りが送られてきました。そして、お約束どおり「謝辞」に私の名が。

インターネットの威力を感じた、入手時の偶然と、譲渡時の不思議なぐらい偶然の出来事でした。

そして、この原稿の見直しをする予定の 30 分前に、何気なく見ていたオークションのログから、この時のやりとりを発見するのも、偶然のみちびきを感じてしまいます。



新連載 !! 玉木宏樹、幻の書籍
「音楽著作権と JASRAC 問題」
その 1

玉木宏樹遺作

序章

<JASRAC は伏魔殿 ?>

*JASRAC とは、何をやっている所か？

皆さんは JASRAC(ジャスラック)という名の団体の存在を御存知でしょうか、団体名とかの認識はなくても、ジャスラックという響きはどこかで耳にされていると思われます。しかし、ネットを拠点にしている多くの人たちからは「カスラック」と激しく罵倒され、蛇蝎の如く嫌われています。本当にカスラックなのかどうかも含め、ジャスラックは一体どういうことをやっている所なのかを簡単に説明しておきましょう。

JASRAC とは正式名称を社団法人日本音楽著作権協会と言い、英語名が **Japanese Society for Raights of Authers , Composers and Publishers** である所から、その頭文字をとって略称としています。日本の組織なのに(実は演歌派が実権を握っている)英語名は落ちつかないとして、芥川也寸志氏が会長の時「音権協」という略称を考え、電話も会報も「音権協」として普及をめざしましたが、一向に根づかず、却って JASRAC の名の方が浸透してしまいました。

さて JASRAC とはどのような業務をしている所でしょうか？ 表向きは、日本の音楽(といっても歌の比重がとても重い)の著作権、つまり作詞家、作曲家、音楽出版社の著作権を管理し、使用状況を調査して、著作権使用料を徴収し、一定の手数料を引いて作家に分配する機関です。表向きと書いたのは追々書いて行きますが、別に裏向きがあるということではなく、徴収先と徴収方法が納得行くものなのか、また分配が正しく行われているかどうかの透明性に問題があるのではないかと、ということです。徴収と分配に問題があるとしたら、JASRAC の存在の根幹をゆるがす事態です。

徴収先の主立った所は、NHK、民放等の放送局、レコード協会、映画、DVD 業界、コンサート、ライブハウス、空オケ、そして、今大問題になりつつあるインターネット配信等です。

***問題点は何か？**

カスラックとまで言っているネット関係者との嫌悪な関係は後に詳しく書きますが、ライブハウスやジャズ喫茶からの強制徴収や逮捕劇は、まるでヤクザまがいの利権団体と指差されています。作詞家、作曲家の中には、何もそこまでしなくてもいいだろうという人も多く、音楽文化の向上に向かって行動してほしいのに、これじゃまるで著作権に巣食う利権団体に思われてしまう、と危惧している人たちも多いのです。

放送局との包括利用契約、いわゆるブランケット方式にも大きな問題があります。後に詳しく書きますが、この契約では個別楽曲の利用は明らかにならず、年間幾ら、という前払い制ですから、ドンブリ勘定になる危険性は常に孕んでいます。

そして一番重要なことは、こういうことです。JASRAC は作詞家、作曲家が創ったのではなく、日本政府が創った、という事実を大多数の人は知らないのです。国家が創ったのであれば、お役所的体質になるのは当たり前で、徴収も「オイコラ」的になるのは当然でしょう。

この本は JASRAC の変な歴史を踏まえ、諸問題を明らかにして行きます。世に音楽著作権関係の本は沢山あり、法律的には私よりずっと詳しい専門書も多々あります。しかし、なぜかもどかしく隔靴搔痒の感は否めません。それは書いている人たちが、当事者ではないという所にあるんじゃないかと思います。

私自身は、現役の作曲家であり、CD もたくさん出しています。また会員歴は 40 年を越え、1999 年から 2005 年まで 6 年間評議員を務め、JASRAC の大問題点を内部からつぶさに見てきました。別に内部告発というほど大げさなことではないのですが、評議員になる以前の自分の身にふりかかってきた不条理な事件を糾すべく孤独な闘いの数々も報告しつつ、JASRAC と音楽著作権の未来を考えて行きたいと思っています。

第一章

<JASRAC 設立のきっかけ、プラーゲ旋風>

***著作権と JASRAC について。**

音楽著作権がどういうものか、という説明は折にふれて書きますが、ここではおいておきます。というのも、詳しく書き出すと本が数冊にもなるほど深い問題をはらんでいるからです。細かいことを言うと、未だに英米法と大陸法で

は違いがあるのです。日本では大体大陸法(ヨーロッパ方式)に準じています。

そういう話以前に歌や器楽曲を無料で使って入場料をとるコンサートは絶対にできないだろうということは想像できると思います。コンサートだけではなく、放送、映画、レコーディング、その他、作品を使って売り上げをはかるためにはすべて料金が発生しますが、これを(音楽)著作権使用料といい、この著作権を管理しているのが JASRAC なのです。一時、空オケボックス等で JASRAC G メンの摘発を受け、罰金を払わされたとか、ジャズ喫茶やライブハウスでも揉め事が発生していることを御存知の方も多いと思います。我々作曲家にとって、広範囲に著作権を管理してくれるのは JASRAC だけ(他の団体はアテにならない)なので無用な軋轢を起こして嫌われるような存在になってほしくはないので、難しい問題が山積していますが、JASRAC も善処してほしいものだと思います。

ところで一部にとんでもない誤解があります。それは、JASRAC に入らないと、著作権は認められないとか、JASRAC が著作権の有無を決めている、とかの話ですが、これは全く根拠のないウソツパチです。著作権というのは、著作物が完成したときに、発生するものであり、メディアを通して公表された著作物が商品化されれば、当然、著作権使用料が発生するわけで、このこと自体と JASRAC の存在は関係ありません。現に、JASRAC の会員でない作家(ノンメンバー)は沢山います。ただし個人的にはノンメンバーだとしても、その作品の著作権の管理を代行する音楽出版社の殆どが JASRAC の会員であることが多いので、間接的には JASRAC の世話になっているとはいええます。もし意地を張って音楽出版社や JASRAC と無関係でいた場合、全国津々浦々での楽曲使用の把握は個人では全く不可能なので、大変なとりっぱぐれにあってしまいます。

さて、日本で楽曲使用にお金が発生するということが浸透したのはいつごろで、JASRAC が設立されたのは何年頃だったのでしょうか。その答えは、1939(昭和 14 年)年なのですが、これは早いんでしょうか、遅いんでしょうか。どちらかは分かりませんが、戦雲が立ちこめてくる頃と考えると、よくやったとはいえるでしょう。しかし、1939 年に今の JASRAC の前身が設立されるに到ったウラには、NHK を始めとする各種文化団体、作詞家、作曲家、興行団体がひっくり返るような大騒動に巻きこまれました。それが、世にいう「プラーゲ旋風」です。

(続く)

今後のスケジュール

2013年9月21日土曜日 13時30分開場 14時開演

♪世界を救う♪【純正律音楽コンサート】

会場：新宿文化ホール(小ホール)

JR／京王線／小田急線 新宿駅東口 徒歩 15分

東京都新宿区新宿6-14-1 TEL. 03-3350-1141

出演：水野佐知香(ヴァイオリン)、三宅美子(ハーブ)、吉原佐知子(箏)、他

入場料：3,500円 (会員特別価格3,000円)



おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。

次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 NPO 法人 純正律音楽研究会

お電話：03-5317-0291 FAX：03-5317-0289

e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp

<http://just-int.com/>

平成 25 年 8 月 31 日 発行責任者：NPO 法人 純正律音楽研究会

編集：相坂政夫